北海道新聞

平岸の歴史を訪ねて

～開拓編～

第２５回、本願寺道路①

本願寺道路と現如上人

天神山の麓にたたずむ澄川墓地の一角に『本願寺道路終点』と書かれた石碑がひっそりと建っています（図１）。これは、平岸開基百拾年記念会事業の一環として、昭和５５年に建立されたものです。裏面に由来が記してあります。「本願寺道路は、明治三年東本願寺現如上人北海道新道として伊達市（現）尾去別に起工。翌四年十月この地に至り平岸街道と結ぶ。」

本願寺道路は、伊達市尾去別から長流川沿いに壮瞥を通って洞爺湖を東回りに洞爺へ至り、その後は現在の国道２３０号線にほぼ沿う形で、喜茂別を経て中山峠を越え、豊平川に沿って、定山渓～簾舞～真駒内を経て、平岸に至る道路でした（図２）。中山峠の道の駅の駐車場の外れに「現如上人之像」が建っています（図３）。現如上人は、東本願寺第二十二代門首であり、北海道の開拓に大きく貢献をされています。札幌本道（今の国道３６号線）が開通したのが明治６年なので札幌と道南を結ぶもっとも古い幹線道路となります。この道路は、東本願寺が明治政府に建設の許可を願い出る形で建設が始まりました。「寺から里へ」ということわざがあります。檀家から寺へ寄進することはあってもその逆はありえないという意味ですが、それぐらい寺が主体となって公共事業を行うことは珍事とされることでした。なぜ東本願寺が未開の土地で長さ１００キロにも及ぶ道路を建設することになったのか、それを理解するには本願寺の歴史を振り返る必要があります。

本願寺の歴史

本願寺教団の宗派である浄土真宗は鎌倉時代に親鸞が開きました。成立当初からしばらくは微弱な組織に過ぎませんでしたが、戦国時代に親鸞から八世の子孫にあたる蓮如が、農村の生産力の増大を背景に急速に力をつけた農民階級を取り込み組織化することで、大きく勢力を増すことに成功しました。彼らは一向宗とも呼ばれ、各地で一向一揆を起こし、土地の領主と壮絶な戦いを繰り広げました。その強さの源は、『主従の縁は一代、弥陀の本願は永劫』との言葉にあるように主君への忠誠心よりも信仰心を優先させ、さらに『進めば極楽、退けば地獄』という親鸞も言ったことのない不思議なスローガンをかかげ、少しも死を恐れない点にありました。三河領主であった徳川家康も壮年期に一向一揆に遭い、家臣団の半数が一揆側に加担するなど苦い経験をしています。この経験により、家康は本願寺教団の力が大きな脅威であることを身をもって理解することになりました。家康は関ヶ原の戦いに勝利した後、本願寺教団の力をそぐ目的で、教如を支持する一派に土地を寄進して分裂工作を仕掛け、東本願寺を成立させました。このような由来で本願寺は、幕府寄りの東本願寺と、朝廷寄りの西本願寺に分かれることになりました。

図１．本願寺道路終点の碑

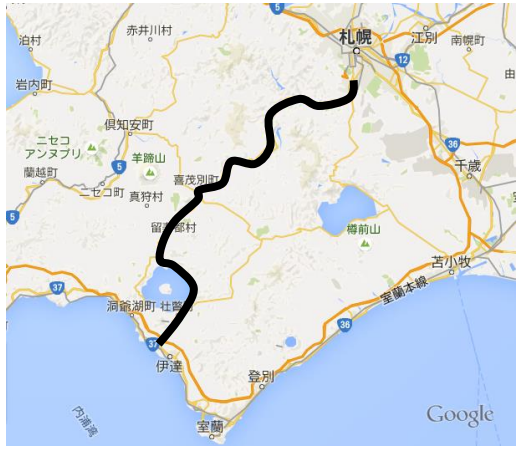

図２．本願寺道路ルート

図３．現如上人之像

戊辰戦争と東本願寺

幕末、外交問題を契機に幕府と薩摩・長州にかつがれた朝廷の間で争いが起きると、東本願寺も否応なしにその争いに巻き込まれていきました。以下のくだりは、『東本願寺北海道開教百年史』より抜粋したものです。慶応４年（１８６８年）１月３日、遂に両者の争いは武力衝突（鳥羽・伏見の戦い）に発展します。このとき東本願寺門首厳如のもとに、朝廷より使者として山階宮が来られ、「本日朝廷の会議の席で、東本願寺は幕府方と眺められるから薩藩兵は東本願寺を焼き討ちする方針だとある人が言った。それで自分は東本願寺門主と親戚（義理の兄弟）であるから、早速門主に面会して真意を確かめるゆえ、暫時その処置を待ってもらいたいといった。そういうわけで今来たのであるが、東本願寺の真意はどうなのか」と尋ねられました。厳如上人は言下に、「東本願寺は徳川から恩恵を受けてはいるけれども、皇国の臣民として公私の別はよくわきまえておりますから、朝廷に反逆する考えは最初から毛頭持っておりません。」と明確に答えられました。

この一連のやりとりから、東本願寺が幕府寄りであったことが周知の事実として広く知られており、このようなデマが事実として受け入れられる空気が官軍側にあったということがわかります。こうした状況で、東本願寺は偏見を払しょくするために涙ぐましいまでの行動に出ます。厳如上人は朝廷への異心が無い証として、次の誓詞を携えて参内しています。

『朝廷遵奉之儀　光勝　光瑩ヲ始メ門末一統　更ニ異心無之候　徳川家由緒ノ儀ハ軽ク　天恩ノ儀ハ重ク候辺決而心得違申間敷候　爾ル上ハ　如何様ノ御用ヲモ拝承仕度　此段宜敷御執奏奉願上候　仍而誓書如件』

わざわざ徳川家の恩は軽く、天恩は重くと書いて敵意が無いことを示し、いかなる御用も拝承したいとまでへりくだっています。さらに、朝廷からの要請に応じて、数回にわたり多額の献金を行いました。もっとも献金は、東本願寺だけでなく西本願寺にも命じられています。新政府は収入といえば、徳川家の直轄領からの収入のみでした。財政基盤が貧弱にもかかわらず、対内的にも対外的にも課題が山積しており、北海道の開発には手がつけられない状況でした。一方、ロシアとの間で樺太・千島をめぐる国境争いが激しくなっており、北海道の開発は急務となっていました。このような中で、“いかなる御用も拝承”したいと言った東本願寺が目をつけられ、新政府の副総裁であった三条実美から内談があり、北海道の開発を請け負わされます。もっとも、新政府の手前、東本願寺から北海道の開拓を願い出たということにし、政府がそれを許可するという形式がとられました。こうして、東本願寺は厳如上人の子、若干１９歳の現如上人に率いられ北海道の開拓へ向かうことになります。

参考資料　東本願寺北海道開教百年史　真宗大谷派北海道教務所

バックナンバーお届けいたします：ご希望の方は販売所までお気軽にご連絡ください。ご自宅までお届けいたします。

［編集後記］　～制約は発明の母～

ＨＴＢの人気番組水曜どうでしょうは「低予算、低姿勢、低カロリー」の「３低」をモットーにしているそうです。どんな仕事にも制約はつきものです。それは時間的な制約であったり、金銭面であったり様々ですが、大事なことはこれしかできないとネガティブにとらえるのではなく、まだこんなにできることがあると積極的にとらえることでしょう。新聞販売所にも、まだまだ地域のためにできることがあるはずです。自分の心に制約をかけることだけはせずに、これまでの常識に捉われずチャレンジしていきます。

執筆者：道新永田販売所営業主任　伴野卓磨
１９７７年室蘭市生まれ、登別市育ち。金沢大学理学部地球学科博士課程（古生物学専攻）を修了後、六花亭に入社。２０１１年より現職。

◇発行元◇
㈲北海道新聞永田販売所
〒０６２-０９３６
札幌市豊平区平岸６条１３丁目７-１８
Tel：０１２０-１２８-３４８
Fax：０１２０-１２８-３５８

◆この連載は毎月１日・１５日の北海道新聞朝刊に折り込みしています。

76.5MHZ FM Radio Station APPLE
FMアップル（76．5MHZ）にて
「平岸の歴史を訪ねて」放送中！
今月は7月16日（木）午前11時から